

## 『1984年』にみられる支配する／される欲望

神尾春香

### 序論

George Orwell は数多くのルポルタージュやエッセイ、評論文の中で全体主義や独裁政治を弾劾し続けたが、一般によく知られる彼の代表作は *Animal Farm* と *Nineteen Eighty-Four* という二つの小説である。『動物農場』ではスターリン体制下のソ連をモデルとした全体主義体制が描かれているが、動物の世界に置き換えられた寓話であるため、残酷さは幾分か緩和されている。ここで描かれているのは、理想郷だったはずのコミュニティが独裁体制へと変貌していく過程である。一方の『1984年』はオーウェルが死の間際に執筆した作品で、前作『動物農場』の世界をさらに陰鬱で残酷にしたディストピア小説である。『1984年』では、権威者による統治手法がより具体的で緻密に描かれているため一層凄惨な印象を受けるが、恐怖政治の実態が明らかにされると同時に、人間の本质が暴露されている点が興味深い。一般的に『1984年』は未来の管理社会を描いた予言書として、あるいは実在の社会全般への警告書として影響力を持っている。本論では、『1984年』を通して一つの支配体制に対する糾弾だけではなく、人間全般についての観察や問題提起がなされている点に注目し、テキストの分析を試みたい。

### 1. 支配の願望

小説の舞台である全体主義国家オセアニアでは、「党 (the Party)」が国民を対象に絶え間ない監視を行い、情報、歴史、言語、思考すべてをコントロールしようとする。党による絶対的な支配のもと、主人公 Winston は個人の自由を許さない党に対して疑念と反感を抱くようになる。「党」が国民

を支配する際、障害となるのは人間が持つ「強力な本能 (some powerful instinct)」であるが、党はコントロールしきれない強力な本能をある程度封じ込め、推進力として利用する。また、国民の集団的な反逆を回避するために、党は民衆同士の密接な関わりを排除し、友人、恋人、家族同士に生まれる本能的な愛情や絆を摘み取ろうとする。

こうしたなか、ウィンストンは抑圧された人間の本能の解放こそが、「党に対しての一撃」(145) となると考える。彼は党を粉砕する原動力となるものが「裁可されない単純な欲望 (the simple undifferentiated desire)」、「動物的本能 (the animal instinct)」、そして「人間の精神 (the spirit of Man)」であると主張し、人間が持つ本能や道徳的理念に希望を見出す。しかしながら、抑制されない人間らしさ、または人間性とは本当に信頼に足るものなのか。その人間性が無謬だと言い切れるのだろうか。そこで1章では「人間性」の実態を検証しながら、被支配者にも支配者と同じように他者への支配願望があることを指摘したい。

党により男女間の愛や性が抑圧されるなか、ウィンストンは Julia との関わりにおいて禁じられた感情を強めていく。ジュリアと知り合う前、ウィンストンが彼女に対して抱いていた最初の感情は「不安と敵意」であった。彼女を「異端者に対するスパイ」ではないかと疑い、密告される前に「棍棒で殴り殺してやる」(18) と考えるような暴虐さを忍ばせていた。彼は肉体に欠陥（静脈瘤）を持つ自分などが若い女性に相手にされるわけがないと考えているが、そもそも性欲を持つこと自体を禁止される社会において、女性との軽率な接触は許されない。つまり彼の抱く屈折した女性観は劣等感と欲求不満が原因の一つだということになる。

ジュリアに対し強い嫌悪感を抱いていたにもかかわらず、ウィンストンは彼女から愛の告白を受けると瞬時に、「求愛を拒むつもりはさらさらない」(126) と思い、若々しい肉体を逃すまいとする。この時点で、彼女への敵意や殺意は「純粋な欲望 (pure lust)」に変わる。そして恋人関係になると、彼女に「純粋な愛情 (pure love)」さえ感じるようになる。しかしそうした

愛情の背後にはウィンストンの女性軽視の見方が垣間見える。ウィンストンはジュリアに対し庇護欲、あるいは父権的な保護者意識が芽生えるようになるが、それに加えて、彼女はウィンストンにとって「欲するだけでなく手に入れる権利があると感じられる対象」(160)であることが示され、ジュリアに逢瀬の約束を取り消されると激しい怒りを覚える。つまりウィンストンはジュリアに愛情を感じてはいるものの、所有物のように扱っている節があるのだ。これらのことから、ウィンストンは男女間の「裁可されない単純な欲望」が党を破る原動力の一つであると信じているものの、無意識のうちに女性をコントロール可能な弱者とみなしているため、彼自身の愛情や欲望には女性に対する利己的な支配欲が伴っていると考えられる。<sup>1</sup>

人間らしい感情は党によって完全に排除されようとしているが、下層階級プロール (the proles) のなかにものみ残存していると考え、ウィンストンは彼らに強い関心と憧憬の念を抱く。ウィンストンは何度か密かにプロールの住む貧困街を訪れるが、ある日、貧民街マーケットで何百人もの凄まじい叫び声を耳にする。プロールによる反体制の暴動がついに始まったと期待に胸を膨らませるウィンストンだったが、この叫び声の正体は、市場の露店に集まった女たちによるシチュー鍋の争奪戦であった。プロールによる反体制の暴動を期待していたウィンストンは、事実を目撃して落胆するが、それでもなお、この戦慄を覚えるようなプロールたちの声が反逆として党に向けられたならば、体制を崩壊させることができると確信する。

しかしながら、こうしたプロールたちの姿はウィンストンの最大の嫌悪の対象である「ネズミ」の姿を連想させる。プロールの住む貧民街には、「妙にネズミの穴を思わせる」(95) 壊れた戸口の家が並んでいると記されているし、プロールのシチュー鍋争奪戦は、自分の快楽を最優先とし、餌を奪い合うネズミの姿と重なる。プロールたちの間にはウィンストンが希求するはずの「動物的本能」が見出せるが、彼らは「我欲に忠実な獣」の象徴として暗示されているため、単純に肯定することはできない。また本人の意向に反して、プロールをどこか見下すようなウィンストンの描写もいくつか見られ

る。彼は貧民街の娼婦に対して強い嫌悪感をあらわにしたり、貧民街の舗道に転がっていた、手首のところで切断された手を「まるでキャベツの芯であるかのように」(191) 溝に蹴り落としたりする。ウィンストンはプロールを理想化しながらも無意識に軽蔑し、下等生物と位置付けるような言動を行うのである。

ウィンストン自身が宿す「動物的本能」は、皮肉なかたちで読者の目に晒されることになる。幼少期の彼は飢餓感に襲われるといつも、母と妹が空腹なのにも構わず、彼女たちの食料をくすねようとしていた。ある日、残りわずかなチョコレートを奪い取って一人貪るが、それを最後に母と妹には二度と会えなくなる。この出来事はウィンストンにとって「意識から追い出した」あるいは「取り消したい」(140) 過去の記憶である。そして彼の「動物的本能」が最も明確に、また印象的に露見されるのは、物語の最後、恋人に対する裏切りの場面においてである。党による拷問の最終段階においてウィンストンは最大の恐怖に直面するが、その際、身近な人間であるジュリアを身代わりにして逃れようとする。

But he had suddenly understood that in the whole world there was just *one* person to whom he could transfer his punishment — *one* body that he could thrust between himself and the rats. And he was shouting frantically, over and over.

'Do it to Julia! Do it to Julia! Not me! Julia! I don't care what you do to her. Tear her face off, strip her to the bones. Not me! Julia! Not me!' (329)

彼は自己保身のために、最も大切であるはずの女性を敵に売り渡してしまう。こうしたことから、作中の「動物的本能」は、強圧に負けない意志や生命力というよりも、自分の快樂を最優先とした利己的衝動や自己保存欲というべき側面が際立っているように思われる。

党側の暗部が露呈されるなか、ウィンストンは党が打ち勝つことのできないものこそ「人間の精神」であると断言する。憎悪と恐怖の世界を造りあげ

ようとする党の残虐性を身をもって感じたウィンストンは、こんな非道な連中に比べると、自分は道徳的に優越した、清廉な存在なのだと主張する(309)。しかしながら、反体制組織の一員だと偽る O'Brien に対して、党を滅ぼすためなら殺人、強迫、捏造等「なんでもをする覚悟がある」(199)と発言している。また、ウィンストンが度々見る悪夢の中で、はっきりとした姿は現れないが「恐ろしくて面と向き合えないもの」(167)が登場する。その正体はウィンストンが嫌悪するネズミだと推測できるのだが、ネズミという生物から連想される「浅ましさ」を人間、あるいは自分自身と結びつけることをウィンストンが恐れていることも察せられる。人間が持つ卑しい側面を自身が抱えていることを認めたくないために、彼はいつも都合の悪い記憶や意識を「追い出そう」とするのである。彼の醜悪な本質は最終的に、党の拷問によって完全に暴露されることになる。ウィンストンは党に屈し、ジュリアも同じ運命を辿る。二人の間で裏切りはありえないと言い放ったにもかかわらず、互いへの愛と信頼は簡単に消え去ってしまった。

このように、民衆の「人間性」は党を崩壊させる原動力になりうるが、多くの難点を抱えており、単純に美化できないことがわかる。人間らしさの背後にある醜悪な性質が暴き出された時、彼らは絶望し、破滅していく。ウィンストンの場合も、彼は党の不道徳を指摘し自らの正義を主張するが、党と同等の悪行を働きかねない、あるいはすでに実行していることが暴露される。そして、彼が忌み嫌う「ネズミ」の卑しく獐猛な特性を、彼自身が有しているのである。特に、党がウィンストンたち国民を支配しようとするように、ウィンストンもまたジュリアを支配しようとする。そして党が国民を下等生物だとみなすように、ウィンストンもまたプロールを無意識に見下し、ネズミと同一視している。こうした観点から、支配者と被支配者間に同質性を見出すことができる。党と同等の思考パターンを一般市民が持ち合わせていることから、私たちは被支配者のコミュニティにおいて、支配構造の縮図を目撃することになるのである。

## 2. 自ら服従する人々

抑圧された社会に生きるウィンストンにとっての自由や幸福とは如何なるものだろうか。彼が主張するところによれば、自由とは「二足す二が四だと言えること」(93)、「党を憎みながら死ぬこと」(323)であり、党への一撃は「ジュリアとの抱擁」で、「絶頂は勝利」(145)となる。つまりウィンストンにとっての反逆とは「自由意思 (free will)」を持つことであり、それこそが党に対する「勝利」と等しいのである。そこで2章では、作中にたびたび登場する「勝利 (a victory)」という言葉が持つ意味合について考察する。この「勝利」は状況によって異なる旨趣で使われるため、二重性をはらんでいることになる。

ウィンストンの生きる社会では自由意思を持つことは最大の罪とされ、その思考の片鱗が見られた人間は徹底的に排除される。彼はそれを知りながらも、絶対的な権力に一石を投じようとする。自由意志、つまり党への憎悪とジュリアへの愛情を持ち続けようとするが、結局彼の反逆は挫折に終わってしまう。思考犯罪を犯したとして党に捕まり、壮絶な拷問の末に彼の身体と精神は崩壊する。終幕において「再教育 (re-educating)」させられたウィンストンは党の信奉者となり、最高権力者 Big Brother を愛するようになる。小説の最後におけるウィンストンの心情は、次のように記されている。

Winston, sitting in a blissful dream, paid no attention as his glass was filled up. He was not running or cheering any longer. He was back in the Ministry of Love, with everything forgiven, his soul white as snow. He was in the public dock, confessing everything, implicating everybody. He was walking down the white-tiled corridor, with the feeling of walking in sunlight, and an armed guard at his back. The long-hoped-for bullet was entering his brain.

He gazed up at the enormous face. Forty years it had taken him to learn what kind of smile was hidden beneath the dark moustache. O cruel, needless misunderstanding! O stubborn, self-willed exile from the loving breast! Two gin-scented tears trickled down the sides of his nose. But it was all right, everything was all right, the struggle was finished. He had won the

victory over himself. He loved Big Brother. (342)

ウィンストンは反逆者としての過去を恥じ、被支配者としての「幸福」を感じながら、やがて訪れる処刑の瞬間を待ちわびる。彼が「隷従すること」によって「勝利と幸福を得た」ということが示されているが、ここでの「勝利」は、ウィンストンが重要視してきた「自由意思」に結びつく勝利とは異なるものである。

ウィンストンが抱いた「隷従への愛」という感情は一見奇妙なものに思われるが、実際に行われた心理的実験や歴史的事実に鑑みればさほど奇異ではない。例えば Stanley Milgram による「服従実験」<sup>2</sup> では、人間は誰しも状況さえ揃えば簡単に権威に服従する事実が判明しているし、それより以前に、同様のことを歴史上で実際に証明したのが Adolf Hitler であった。彼は人間を軽視し脅しあげながら、怒りと憎しみに指向性を与えて熱狂させ続けることで、集団を御すことに成功した。そして強者に支配されたいという大衆の奇妙な欲求を十分に理解していた。<sup>3</sup> ヒトラーが実行した大衆操作は、『1984年』における党の方針そのものである。

自らの自由を放棄して絶対的な存在と結びつきたいとする心理は Erich Fromm の *Escape from Freedom* にも詳細に描かれている。「隷従への愛」を抱くに至ったウィンストンの心理状態は、フロムの理論を当てはめることで把握しやすくなる。“Powerful tendencies arise to escape from this kind of freedom into submission or some kind of relationship to man and the world which promises relief from uncertainty, even if it deprives the individual of his freedom.” (Fromm 35) フロムによると、人間は自由になればなるほど、耐えがたい「孤独感」や「無力感」に脅かされるようになるという。孤立の恐怖を回避するために、自由から逃げ出すことを選択する。「決断すること」や「自分の運命に責任を持つこと」という自由の重荷から解放されるために圧倒的な力への従属を求めるようになる (Fromm 154-155)。そして、権威主義的思考を持つ人々にとっては、“The only possible happiness lies in the

submission to these forces.” (Fromm 169) だと指摘している。

抑圧された社会のなかで自由を求めたウィンストンは異端者であった。他人にはない反逆心、自我を持って生きることはつまり、孤独、不安、苦悩を抱えて生きることである。党の教義を盲目に実行する妻や、疑いの眼差しを向けてくる友人たちに囲まれ、常にプレッシャーを感じていた。党に疑念を持たない多くの人間が正常であり、自分の方が狂っているのではないかという不安感に常に苛まれていた。党に対して完全な敗北を喫した時、ウィンストンに残された道、あるいは最後の幸福は、「権威に服従すること」であったのではないだろうか。なぜなら、反抗心や疑問を持たず、ただ権威に従って生きることは、すなわち孤独、迷い、責任から解放された生き方だからだ。それを叶えてくれたビッグ・ブラザーへの愛を実感し、彼は幸福に浸る。それゆえ、最後にウィンストンは従属によって幸福を得た、つまり「勝利」を手にしたことになるのである。Joseph Adelson は William James の言葉を用いて、物語開始時のウィンストンの状態は “soul sick and divided, wrong, inferior and unhappy” であり、彼が権威に統一されると “right, superior, and happy” になると述べている (Adelson 116)。痛みや苦しみ、孤独から「解放」された状態が「自由」だといえるならば、彼は党のスローガン「自由は隷従なり (FREEDOM IS SLAVERY)」をまさに体現したというわけだ。

オブライエンは「思考犯罪」を犯した人間を捕らえて改心させる際、嫌々ではなく本心から党への忠誠を誓う人間へと作り変えるのだと主張する。こうしたオブライエンの思惑通り、ウィンストンは最終的に自ら望んで服従を受け容れる。「自由意思」を持つことを「勝利」としていたウィンストンは、皮肉にも、その「自由意思」でもって服従を選択させられたということになる。

ウィンストンにとっての「勝利」とは、始めは「自由意志を持つこと」であったが、最後には「権威に服従すること」へと変化する。そのため「勝利」という表現は反復されるが、異なる意味合いで繰り返され、そこにはアイロニカルな二重性が含まれることになる。ウィンストンは身体的自由ではなく、



内面の自由を重要視しており、個人の思想や客観的事実は改変不可だと信じていた。<sup>4</sup> 虚実関係なく「自白させること」はできても、「信じさせること」はできない (192)。つまり、党には人の心に入り込んで感情を変えることなどできないと思っていた。だが党は国の歴史や記録を書き換える<sup>5</sup> のと同じように、結局はウィンストンの心をも書き換えてしまったのだ。

### 3. 人と社会の共棲的關係

『1984年』では巨大な権力に屈した人間の姿が晒され、主人公の信じた希望や信念が打ち碎かれる結末となっている。あらゆる点で悲劇的であるため、Tom Hopkinson が指摘するように、この小説の陰鬱さと、オーウェル自身の病気との間の因果関係を推測することも可能であろう。<sup>6</sup> また、Richard Rees も物語の結末を悲観的に捉えており、オーウェルが他人を愛しうることの可能性にすら疑念を抱いていて、最後まで守り通すことのできる愛の証拠を要求しているのだと分析している (Rees 23)。

その一方で、『1984年』のエンディングは単なる悲劇ではなく、絶望感の中にかすかな希望を見出すような解釈もある。Thomas Pynchon は小説本編の後に巻末附録として書かれたエッセイ「ニュースピークの諸原理 (*The Principles of Newspeak*)」により、暗い結末に救いの光が与えられていると指摘する。

It is as dark an ending as can be imagined.

But strangely, it is not quite the end. We turn the page to find appended what seems to be some kind of critical essay, 'The Principles of Newspeak'. ... From its first sentence, 'The Principles of Newspeak' is written consistently in the past tense, as if to suggest some later piece of history, post-1984, in which Newspeak has become literally a thing of the past — as if in some way the anonymous author of this piece is by now free to discuss, critically and objectively, the political system of which Newspeak was, in its time, the essence. Moreover, it is our own pre-Newspeak English language that is

being used to write the essay. Newspeak was supposed to have become general by 2050, and yet it appears that it did not last that long, let alone triumph, that the ancient humanistic ways of thinking inherent in standard English have persisted, survived, and ultimately prevailed, and that perhaps the social and moral order it speaks for has even, somehow, been restored. ... In its hints of restoration and redemption, perhaps 'The Principles of Newspeak' serves as a way to brighten an otherwise bleakly pessimistic ending — sending us back out into the streets of our own dystopia whistling a slightly happier tune than the end of the story by itself would have warranted. (Pynchon xxii-xxiv)

ピンチオンが言うように、「ニュースピークの諸原理」では党が推進した新たな言語「ニュースピーク」ではなく標準英語の過去形が使用されているため、『1984年』の未来においてニュースピークは普及せず、かつ党が崩壊したということが暗示されている。<sup>7</sup>つまりビッグ・ブラザーが支配する体制が崩壊した後、新たな社会の誕生が予想されるのである。ただし、それを「回復と救済」や「わずかに幸せな調子」と結びつけるのは些か安易な意見に思われる。なぜなら、オセアニアと同等かそれ以上に恐ろしい国家が誕生し、管理体制が繰り返される見込みもあるからだ。そこで3章では、『1984年』のエンディングが示唆する可能性について考えながら、支配的秩序における人間の本质についてさらに注視したい。

本論の1章では、被支配者側のウィンストンが持つ支配欲について論じており、例えば、党が行使する権力への憧憬であったり、女性に対する言動から読み取れるような、自分のコントロール下に置きやすい弱者への支配意識などが見られることがわかった。そして2章では、彼が孤独や迷いから解放されるために自発的に党に服従する姿を分析した。そうすると、ウィンストンは支配欲と被支配欲の両方を持ち合わせていることになる。このような性質はウィンストンだけではなく、オブライエンにも備わっている。というのも、彼は逮捕した者を精神的・肉体的に支配するが、その一方でビッグ・ブラザーに忠誠を誓う服従者でもあるからだ。弱者を支配したいという欲望と

並んで、圧倒的に強い力に平伏したい欲望を抱えているのである。そんなオブライエンとウィンストンには「サディズム／マゾヒズム」的な依存関係があるように思われる。<sup>8</sup> フロムの理論から推察できるように、オブライエンのような、他人を絶対的に支配し搾取し、苦しむ姿を見ようとするサディズム的傾向の人間は、彼が支配する相手を強く必要としている、つまりサディズムの対象に依存している。片やウィンストンは、自分を直接的に支配する人間、即ちオブライエンに服従する（マゾヒズム的傾向）。ウィンストンはオブライエンが反体制の人間である（と思い込んだ）ために彼に惹かれるだけではなく、自分を圧倒する存在だからこそ畏敬の念を抱く。ウィンストンはオブライエンから拷問を受けながら、彼を自分の「拷問者であり守護者」だと考える：“He was the tormentor, he was the protector, he was the inquisitor, he was the friend.” (280) さらに、「自分を救ってくれる希望」であり、「理解者」だとも語られており、時には、ジュリアの安否よりもオブライエンのことを考える（263）ほど、彼に対する依存的な態度を見せる。

フロムはこうしたサディズムとマゾヒズムの依存関係を「共棲 (symbiosis)」と呼び、両者の共通した願望は「耐え難い孤独感と無力感からの逃避」という根本的な要求に基づいていると分析する (Fromm 156-157)。それゆえ、ウィンストンのなかでは、孤独で無力な自分、あるいは自由という重荷からの逃避願望がオブライエンへの服従へと向かい、その一方で、不安と劣等感を解消してくれるジュリアに対して支配的衝動を抱く（と同時に彼女に依存している）という現象が起こっているのだと考えられる。オブライエンの場合も同様に、強大な力を有する党に従属しながら、非力なウィンストンへの虐待と依存を実行するのである。

以上のことから、支配者と服従者は相補的關係で結ばれており、加えて、個々の人間のなかに支配欲と服従欲の両方が混在していることがわかる。そうなると、支配者と被支配者との分界を見極めるのが困難になるのではないだろうか。社会的には被支配者層であるウィンストンも支配衝動を抱えている。もしもウィンストンが党中枢の一員であったなら、つまり支配者という

「地位」や「役割」が与えられたならば、彼が政治犯たちを拷問する立場にあり、その支配欲が存分に発揮されていたかもしれない。<sup>9</sup>あるいは、Hannah Arendtの言う「凡庸な悪」のように、権威に盲従した人間を残酷行為に走らせる事象もある。人間が生きるためには社会が必要であり、社会の中で役割を与えられ、その役目を果たさなければならない。そこではしばしば、人間の醜悪な部分が引き出されてしまう。そして人は自由を欲しながら、服従へと向かっていく。そもそも本当は支配と被支配の依存関係からの解放を望んではいないのかもしれない。権力者の支配欲と大衆の被支配欲、互いの欲求を補い合うことで社会が成立するならば、体制という表面的な形が変化しても人間のメンタリティが変わらない限り、内部では同じ現象が繰り返されていくだろう。

Pierre Clastresは、国家が瓦解しても権力関係は決して無くならないし、社会の本質的な「区別」は解消しないと論じる（Clastres 207-208）。国家の力は打ちのめされてもいずれ必ず再生するのだと。それゆえ、「ニュースピークの諸原理」で党の崩壊が暗示されているからといって、それが本質的な人間性や社会構造そのものの改革を象徴するわけではない。これらは巻末附録も含めたテキスト全体を通して示唆されているため、やはり『1984年』の未来に期待はできないのである。

## 結論

これまで見てきたように、『1984年』では人間の本質が問題視されているため、党を打ち倒す原動力となりうる「人間の精神」が絶対的に信頼できるものではないこと、自由を求め正義を掲げる人間がいても、その高邁な主張の背後には人間の醜悪さや脆弱性が潜んでいることが読み取れる。ウィンストンは決して「正義」や「良心」の権化ではなく、いかに人間の精神が脆く浅ましいものかを登場人物たちが体現している。

またこの小説においては、支配者のみが悪ではないし、被支配者側が犠牲者として一方的に虐げられているわけでもない。人は孤独感や不安を解消す

るために他人を支配したがかり、時には同様の目的のために自ら望んで権威や強者への服従を選択する。つまり、ひとりの中に支配欲と被支配欲が同居しているという二面性があるのだ。そして支配者と被支配者は共依存的に結びついている。そうした本性を秘めた個々が社会を構成しているため、人間の根源的な欲望と社会体制はある意味で共棲の関係にあるのだと気付かされる。オーウェルは人間の持つ良識や品位に敬意を抱き、憧れ、固執していた。<sup>10</sup> だが、『1984年』の世界では「人間らしさ」は報われない。それどころか、人間の限界を突きつけられているようにさえ感じられるのだ。

## 注

- 1 ウィンストンの偏向的な女性観をオーウェル自身のものと同一視する意見も少なくない。例えば Jenny Talor の “Desire is Thought Crime”、Lesslie Tentler の “I’m Not Literary, Dear: George Orwell on Women and the Family” が挙げられる。
- 2 スタンリー・ミルグラムが1962年に実施した心理学実験のことで、「ミルグラム実験」や「アイヒマン実験」と呼ばれている。一定の上下関係の下で権威者から指示・命令を出されるという人為的な環境を準備し、権威に対する服従心を検証した。実験により、平凡な一般市民であっても、権威者からの命令に接すると、それがたとえ不合理な命令であろうと、自らの常識的な判断を放棄してその命令に服従してしまうことが明らかになった。ミルグラムの *Obedience to Authority: An Experimental View* を参照のこと。
- 3 この点についてはヒトラーの著書『わが闘争』に詳しい。
- 4 Wikkuam R. Steinhoff はオーウェルが「人間は頭の中で自由でいられるのか、真実を知っていれば人は自由になれるのか」という疑問に長く悩まされていたと指摘する (202)。また、オーウェルは ‘As I Please’ のなかで、独裁的な政府の下、「心の内」で自由でいられると信じることと、人間が自主的な個人であると想像することは大きな誤りであると述べている (Tribune, 28 April 1944)。
- 5 アデルソンは、オーウェルの記録改ざんに対する問題意識に関して “We begin to see Orwell’s writing haunted by the theme of falsehood.” (113) と述べている。また、リースは、1937年バルセロナでの体験がオーウェルに歴史の虚偽についての強い関心を抱かせる契機となり、その問題を『1984年』のなかで精密に展開させたと分析する (60)。
- 6 オーウェル自身が “It wouldn’t have been so gloomy if I hadn’t been so ill.” と述べていたと記されている (Hopkinson 33)。
- 7 Erika Gottlieb は『ニュースピークの諸原理』の語りについて、“The voice is impersonal, omniscient, assuming, some kind of an official, institutional consciousness, emphasized by the use of the passive voice.” と述べ、語り手は一体何者なのか、誰に向けて書かれたものなのか、と疑問を投げかけている (267)。
- 8 この点についてはフロムの著書の第5章 (1. Authoritarianism) を参照。

- 9 1971年に行われた「スタンフォード監獄実験」では、普通の人間が特殊な地位や肩書きを与えられると、その役割に合わせて行動することを証明しようとした。被験者を看守役と受刑者役にグループ分けし、刑務所を模倣した施設内でそれぞれの役割を演じさせた。実験が進むにつれて、看守役の振る舞いは攻撃的かつ支配的になり、受刑者役は卑屈に服従するようになった。
- 10 オーウェルは、スペイン内戦中に市民軍に加入して闘った理由を「共通品位 (common decency) のため」(*Homage to Catalonia* 43) だと言ったほどで、カタロニアで出会った人々の人間らしさに心を打たれている。

### 参考文献

- Adelson, Joseph. "The Self and Memory in *Nineteen Eighty-Four*." *The Future of Nineteen Eighty-Four*. Ed. Ejner J. Jensen. Ann Arbor: U of Michigan P, 1984.
- Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*. London: Penguin books, 2006.
- Fromm, Erich. *Escape from Freedom*. New York: Henry Holt and Company, 1994.
- Gottlieb, Erika. *The Orwell Conundrum: A Cry of Despair or Faith in the Spirit of Man?* Kingston: McGill-Queen's UP, 1992.
- Hopkinson, Tom. *George Orwell*. London and New York: Longman's Grace & Co., 1953.
- Milgram, Stanley. *Obedience to Authority: An Experimental View*. New York: Harper & Row, 1975. (岸田秀 (訳) 『服従の心理：アイヒマン実験』. 東京：河出書房新社, 1995.)
- Orwell, George. *Animal Farm*. London: Penguin Books, 2008.
- . "As I Please". *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 3 As I Please 1943–1945*. Ed. Sonia Orwell and Ian Angus. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- . *Homage to Catalonia*. New York: Harcourt, 1980.
- . *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin Books, 2000.
- Pynchon, Thomas. "Introduction." *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin Books, 2000.
- Rees, Richard. *George Orwell: Fugitive from the Camp of Victory*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1962.
- Steinhoff, William R. "Afterword: The Inner Heart." *The Future of Nineteen Eighty-Four*. Ed. Ejner J. Jensen. Ann Arbor: U of Michigan P, 1984.
- Taylor, Jenny. "Desire Is Thoughtcrime." *Nineteen Eighty-Four in 1984: Autonomy, Control, and Communication*. Ed. Crispin Aubrey and Paul Cgilton. London: Comedia Publishing Group, 1983.
- Tentler, Lesslie. "I'm Not Literary, Dear': George Orwell on Women and the Family." *The Future of Nineteen Eighty-Four*. Ed. Ejner J. Jensen. Ann Arbor: U of Michigan P, 1984.
- クラストル, ピエール. 「自由、災難、名づけえぬ存在」. エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ. 『自発的隷従論』. 西谷修監修, 山上浩嗣訳. 東京：筑摩書房, 2013. 191–221.
- ヒトラー, アドルフ. 『わが闘争』上・下巻. 平野一郎・将積茂共訳. 東京：角川文庫, 1973.